

俳句

二千六百春

君在す國土よ二千六百春
初刷や卷頭の殿下笑みおはす
機麗か今し降りくる落下傘
踏めば崩える崖のゆるみや落の藁
春風や車窓を離れぬ富士十里
病み上り跳にぬくき土親し
花散るや墓伏し拜むうしろより
麥刈の浮きつ沈みつ笠一つ
蠶飼ひする間に熟れすぎし麥なりし
麥打つや裸に笠の島男

田村孤雪

たことがなかつた。ところが、今度修學旅行で、日本海を見る事が出来るのだ。

僕等の胸は躍つて、春日山公園を指して山路をたどつた。「この頂上へ行けば、海が見えるぞ。」と、云ふ先生の聲に勵まされて急ぎ足に登つた。

道幅は、たしか一間位だと思つた。この春日山と云ふのは、さう大した山ではない昔、謙信の居城のあつたところだといふ。幾つか曲つた。僕等は相當疲れて來た。「佐渡が見える」とよいがなあ。」と、先生が話しかけた。少し天氣が悪いと、佐渡は見えないさうだ。今日は幸に、良く晴れ渡つてはゐるが、春霞が四方を包んで、遠い山々はぼうつとしてゐる。「オーイ、頂上だぞおつ」突然先頭が叫んだ。みんなどおつと駈出した。上では大きな聲で、がや／＼叫んでゐる。海が見えるらしい。僕も息を切らして駈上つた。

頂上だ。バアツと邊りは展けて、非常に明るい。海だ。蒼青な海だ。其の時の氣持は、壯快といふより外、何とも云はれない

夏座敷月の影さす膳の上
月の路涼みがてらに送らるゝ
喜雨はれて廣葉のものが月にある
蚊遣香本に落ちたる蚊のものがく
すこやかに日焼のわれや休暇明
秋天のものとに裸や藪拓く
草の實のこまごまと露一つづゝ
落栗の濡れて色濃し草の中
木犀の香に文机の朝心
朝市に出す芋洗ふ月夜かな
地蔵より路分れたり曼珠沙華
月の暈中にも侍る星一つ
故郷に寄る家も無き墓参かな
窓塞ぐ絲瓜すれがつ後の月
汗しとど熱の蒲團をかぶり臥す
開墾の野に出集ふて明治節
襟卷に笑める口もと包みけり

「成程廣いものだなあ、何と廣いんだらう」
遙か彼方に、ぼんやり横たふが佐渡ヶ島。
今その方に向つてゐるらしい船が、水平線
近く黒煙を吐いて、小さい影を浮べてゐる
無數の波が、洋々とどす黒い様な蒼色で、又
眞白くうねりを見せて、萬里の果までも續
いてゐる。眼下に見下す直江津の町。汽車
が白煙をはいて、港へと進む。港には大き
な船が一隻、途中に浮いてゐる。

地圖で見れば、向ふ岸までも見えさうな
この海が、佐渡でさへ見えぬ程なのには驚
く。尤も諏訪湖を眺めて、廣い湖だと思つ
て居る僕にとつては、無理もない事である
そればかりではない。それから二年後、二
見ヶ浦へ旅行した時である。海岸へ出た僕
は、眼前に大きな島が、薄ぼんやりと浮い
てゐるのを見た。その時、僕は「淡路島」
と叫んき笑はれた。「成程、よく考へて見れ
ば全然方角が異ふ。馬鹿な事を言つたもの
だ。」と我乍らおかしくなつた。その島とい
ふのは、知多半島であつたのだ。

春日山を下りた、僕等は直江津の海岸へ